特集・管理の中の子ども、教師

子どもをどうみるか（上）

――子どもを追い込むもの――

山崎　徹

はじめに

卒業式を間近にひかえた三月二十三日の日記にA子は次の様に書いてきた。

「……山崎先生にうけもたれてこの二年間すごくかわったと思います。前はわからない人がいても、あまり教えなくて助け合いませんでした。でも、今はあたり前のように六年二組の人が教えています。だから、もし山崎先生にうけもたれなかったら、みんなが人のことを考えずに、そのまま中学校へ行くと思います。……先生がいなかったらみんなちがう人間になると思います。本当に二年間、あっという間だったけど、楽しかったこと、すごくいやだったこと、苦しかったことがありました。でも、そんなおかげですごく成長することができました。本当にありがとうございました。ずっと北小にいて下さい。中学校にいっても遊びに来たいと思います。この二年間のこと、忘れません。」

また、B子は中学入学の翌日、次の様な手紙を私に寄こしてくれた。

「先生、こんにちは。五、六年受けもってもらい、おせわになりました。二年間、いそがしかったり、くやしかったり、おこられたり、ほめられたり……いろいろありましたが、今考えると楽しい日々だったと思います。先生は、わからない人をおいていかず、みんなにね

っしんに教えてくださいました。家の人も『いい先生でよかった。』と言っています。私もそう思ってますよ。」

でも、初めからこのように子どもと私の心が通い合っていたのではない。

「子どもをどうみるか」……私は、このことには、次のような意味と内容が含まれていると思う。

㈠ 子どもの状況を事実と調査に基づいて明らかにすること。

㈡ 子どもの状況に大きな影響を与え、時には規定している諸条件を明らかにすること。

㈢ 自分が子どもを「どう見てきたのか」を実践とのかかわりで明らかにし、その欠点を厳しくえぐり出すこと。

㈣ 子どもの発達と成長を保障する子どもの見方とは、ということを実践の問題として明らかにすること。

以上を私の学校（西蒲原郡分水町立分水北小学校）と私の学級（この三月に卒業した子どもたち―五、六年と二年間担任した）を通して考えていきたい。

C君の問題を通して

C君は、四年生の時には学級委員もして、周りの子どもたちからも「Cちゃん、Cちゃん。」と言われ、クラスの中心的存在であった。五年生の時クラス替えがあったわけであるが、そのC君が五年生の二学期から体の不調を訴え、二、三学期間で二十数日間欠席した。症状は、微熱を訴える(三十七度五分前後)、体がだるい、腹痛、からぜきなどで、医師の診断では特に体の悪いところはなく、いわゆる自律神経失調症ということであった。現在では、元気に中学校に通学しているが、C君の問題には、現在、子どもたちと学校がかかえている諸問題が集中的にあらわれていたように思う。

㈠ いそがしさと「競争」の中に追い込まれて

今、小学校では、陸上・水泳・ミニバスケットなど、課外体育がさかんである。私の学校では大むね次の様になっている。

㋐陸上

四月の始業式後二週目から六月上旬の町の親善陸上大会まで、五、六年全員参加。五限の日は三時三十分から、六限の日は四時から始め、終わりは五時半近く。四月は五、六年担任と体育部が指導、五月になるとほぼ全教師が種目別に指導を割りふられる。夏休みになると分水町近郷陸上大会参加のため、水

泳練習の合間をぬって練習が行なわれる。また、二学期になると、隣の吉田町近郷陸上大会（九月下旬）参加のための放課後練習が行われる。

④水泳

六月上旬の陸上大会が終わるとすぐに練習が始まる。対象は水泳を得意とする子を中心とした四、五、六年生の希望者である。四、五、六年の担任と体育部が指導する。夏休み中の水泳大会まで続く。

⑦ミニバスケット

二学期の初めから、五、六年の女子のうち、得意な子と希望者が参加する。五、六年の男子教師が指導し、十一月末まで続く。

つまり、五、六年になると、子どもたちは四月の陸上から始まり、水泳、ミニバスケットと十一月末まで課外の体育を続けるのである。体育のすぐれている子はすべてに出ずっぱりという状況である。その他夏には、男子は町内の少年野球大会の練習（ほとんどは朝食前の早朝に行われる）にも参加をする。また帰宅後、剣道の道場や町のミニバスケット教室、町の野球チームの練習に参加している子もいる。

さらには、トレーニングタイムと称し、二限と三限の間、冬季間などを除いて、毎日千メートルほど子どもたちはグランドを走っている。その他鼓笛（運動会と町の祭りに参加）練習もある。朝学校に来てすぐに鼓笛練習、二限と三限の間に千メートル走り、昼休みに鼓笛練習、そして放課後また数千メートル走る、というような状況にひどいときにはなってくる。そういう中で、子どたちは、

① いつもいそがしく、何かに追われている生活になりがちになり、

② 他との競争関係の中だけにしか、自分の存在を見出せない「意識」が育てられてくる。

一応、勝利主義にはおちいらないとうたってはいるが、実際には、それらの大会で一人ひとりの子どもがどう自立し、成長していったのか、子ども同士どう連帯を育くみ、集団として高まっていったのかという観点ではなく、「一位をいくつとってきたのか」ということで、教師と学校で評価されるしくみになっている。だから、

「陸上練習の時、山登りが終わってさいごの体そうの時、少しふざけていたので、〇〇先生にバックネットと白いぼうのところをタイヤをひきながら十おうふくさせられました。十おうふくが終わって、タイヤをおいてきても、何だかタイヤをひいているかんじがして、家に帰ってからもタイヤをひいて

いるかんじがしました。」（D君）

というようなことが、「子どものため」という美名で行われるのである。そして、

「きのう学校のバスケットがおわったころ、少しこしがいたかったです。どうせ一日ねておきれば治ると思っていたら、なおさらいたくなりました。授業中でも、礼をするとき、とてもいたいです。今日、学校のバスケットが終わったあと、こんどは立っていられないくらいいたかったです。」

という状態になる子どもまで出てくるのである。教師の中に、

① 何か子どもにさせておかなければ安心できないという心理

② 「自分が優勝させて」子どもにいい思いをさせてやるという考え

③ 勉強がダメでも運動で救われればという考え

④ 子どもたちに挑戦させてやるという考え

などもあり、心の奥では疑問をいだきながらも、実際には「子どもをしごく」という状況が大勢である。

C君は五年生の町の陸上大会では、百メートル、巾とび、リレーとも一位であった。それが二学期の初め風邪をひいて欠席をし、治ってからも九月下旬の吉田町近郷陸上大会に向けての練習に十分な体調で参加できなかったことなども一つの原因となり、不安とストレスがたまり、精神的に不安定な状態になっていったのだと思われる。

課外体育の他に、似たような問題として各種のコンクールである。図画、習字、作文……。「その子をその場で生かす」というようなたてまえで、どれだけ賞に入ったかということで子どもたちや教師の力量を見るのである。だから、当然、教師の手が加えられることになりがちである。そういう中では、子どもたちの中に、「みんなで伸びよう」という意識は生まれてこようはずもない。だから、知らず知らずの間に、子ども同士の関係やクラスのふいん気が何となくギスギスしたものとなってくる。

「どの子にもしっかりとした力をつける。」

「本当の意味での子どもの生きる力とする。」

という観点が教師の間ではうすい。先生方の好きな言葉、子どもに接する時に使う言葉で多いのは、「がんばれ」である。「知性」や「思いやり」ということは、教務室ではほとんど出てこない。異常ともいえる競争体制の中で、どうまく子どもをのせていくか、ということで子どもを見るようになる。だから「人間としての子どもの発達」という見方ができなくなり、目の前のことに追わ

れることになってしまう。そして、子どもたちは「させられている」ことに慣れ、時には「させられている」ことを自分の意志でしているように錯覚し、「がんばる」のである。これが自立のおくれの一因となっているのではないかと思われるほどである。もちろん、課外体育やコンクールで自信をつけ、人間的に成長していく子もいる。しかし、冷静に考えれば、それは少数である。むしろ、「勉強がわからない子の個別指導ができない」とか、「教材研究が不十分なため――その時間もゆとりもなくなっている――授業がおざなりになってしまっている」というマイナスが子どもに与える影響の方が大きいと思う。

また、良心的に課外体育やコンクールに取り組もうとすると、一部の子どもたちには、「先生は自分のことを目にかけてくれない＝自分をしごいてくれない」というような印象を与えてしまうことになる。

何が教師や子どもたちをこのような異常とも思えるような競争に追い込むのだろうか。臨教審は、その答申の中だけにあるのではなく、現実に学校現場の中に入りこんでいると私は思っている。

(二)　孤独の中で……そして攻撃が

C君は六年生の二学期をふり返り、

「自分たちの地域で六年生の男子は六人いるから、一組三人、二組三人と平等に分けてほしかった。今は一組四人、二組二人で平等じゃないので、平等に分けて友だちとよりいっそう仲よくなりたい。」

と「ぼくのなやみ―友だちのこと」で述べている。分水北小学校は、国上小学校、中島小学校、四箇村小学校が三年前に統合してできた、児童数三百五十名前後、全校十二クラスの学校である。約三分の二の子どもたちがバスで通学している。C君の訴えで思い出すのは、かって私が国上小学校で担任したEさんが、三年生の時に書いた次の詩である。（現在は中学二年）

ちこ

ちこのことで夜ないた／わたしは／ちこを／小さいころ土手からひろってきた／思い出すとなける／もう二日たっているのにかえってこない／犬にいじめられているのだろうか／だけど／わたしはちこがかえってくると思う／だって／わたしとおねえちゃんが／いっしょうけんめいそだてたねこだから／かえってくる／きっと／ちこは　はらへっているだろう／かえってきたらかつおぶしごはんを／はらいっぱいたべさせてやりたい／かえってきたらおもいっきり／だいてやりたい／ちこ　寒

かったろう／ちこ　はらへったろう／
といってやってやりたい

ちこがいない／いかをとったりしておこらったり／ねずみを家の中につれてきておこらったり／ストーブの前にねている／ちこのすがたが見えない／ちこの顔や身体を見られないなんていやだな／おばあちゃんは／いぬにくいころされたといっているけどわたしはそれはちがうとおもう／わたしは

ちこは二才なのにどっかにいった／だけどちこはおとなになった／だって二才なのに旅に出ていったんだもんね／ちこの思い出のしゃしんが／はしらにはってあるから／どっかにいってもさみしくない／たまに思い出してなくときもあるだろう／かぞくの人はみんなないていた／おかあさんは
「おかあさんの戸のところでちこがニャーとないていた日はおわかれじゃなかったの」

と言っているけど／わたしはちこをしんじたい／きっとかえってくる／かぞくの人はみんな／ちこがかえってくると思ってないているのだろうか／わたしはそう思う／かぞくの人は　みんな／ちこをかわいがってくれたもの／おばあちゃんは／おひるわたしたちがいないときは／ちこにひるごはんをやったりしてくれた／あとの人は足をあらってくれたりしてくれた

みんな／やさしい人

真木山という地域で三年生では一人しかいなかったEさん。交通事情の関係で友だちのところにも遊びにいけなかったEさんである。地域やクラスでの子どもどうしの結びつきの弱さが気になる。Fさんは、卒業文集に次のような文を書いている。
「わたしは、五年生のときに友だちができました。ほんとうにうれしいことです。それは中島小学校のときは、友だちがいなかったからです。友だちがいれば、いっしょに遊んだり、お話したりできます。友だちがいないことはさびしいことです。いつも一人ぼっちって、だれだってやなものです。だから友だちができたことを心からよろこびます。Kさんと友だちになって学校がもっとすきになってきました。……わたしは夜になると泣いてしまいます。もし、中学校になって、組がちがうと友だちもかわります。だから、わたしの前をさっていくみたいでたまりません。悲しくなってきます……。」
やっとできた友だちとそのうれしさ。それはとりもなおさず、その友だち以外は友だちがいないということであり、だからその友だちと別れてしまうかもしれないという不安で夜、泣いてしまう。六年生の九月

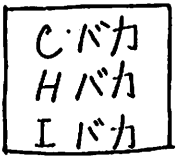
「何でも話をしたり、相談したりできる友だちがいますか」という調査をしたら、三十二人中、二十五人が「いる」と答えている。しかし「いる」と答えているGさん（彼女はクラスのリーダーの一人である）は、別のところでは、次のように私に訴えている。

「本当の友だちはなんだろう。本当の友だちとは、二人が信じ合い、助け合い、二人の間にはかくしごとがない、仲のよい二人。それが本当の友だちだと思う。そんな友だちがほしい。」

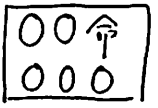
「なやみはたくさんあります。友だちのことでは、本当の友だちです。本当の友だちがほしいんです。友だちが、何ていうか、自分からはなれていくようなかんじがするんです。」

「先生、私のいっている本当の親友といわれる条件は、一つはいっしょに勉強できる人、二つめは相性が合う人、三つめはいつでも遊ぶ人、だから、性格が合って、いつもいっしょにいる人がいい……先生、いませんか。」

前述のようにC君は、五年生の陸上大会で大活躍した。そのC君を含めた陸上大会で活躍した子に対し、陸上大会が終わったころ、



というような落書きが学校内の数か所で見つかった。また、同じく陸上大会や水泳大会で活躍したJさんのくつもかくされたりした。C君に対しては、五年生の十月には、



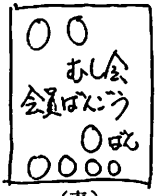
（上の○○にはC君、下の○○○にはクラスの女の子の名前が書いてある。）

というような紙片も発見されている。これは書いた子もわかり指導もしたが、それについて、書いたその子は、

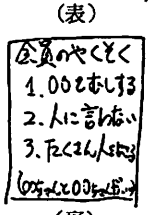
「……けっしてわる気があったわけではありません。かいた日の体育の時間、わたしは休んでいて本を読んでいました。C君たちがわたしたちを見て何かかいていたので、やだね、と言って、そしてあんな紙を書いたのです。でもそんなにしんこくではありません。今までもやったことがおたがいにあったので、そのたびにあやまって解決してきたことです。」

と書いている。

同じころ、次のような紙も発見されている。



（表）



（裏）

これには、クラス十一人の男子のうち九人が組織されていた。このK君を無視する会は一日で解散されたということだが、事実を知って、指導したところ、この会の中心的な存在だったL君は私に対し、「先生、それはもう終わりました。」とほとんど悪いという様子もなく言うのである。二つの紙片の事件は、私の今までの教師生活で初めてのことであり、ショックであった。とりわけ、子どもたちが、自分のしたことがどれだけ人を傷つけることなのかわかってくれず、「たいしたことではない。」「もう終わりました。」と言い放ったことがショックであり、毎日がつらかった。

また、六年生の十一月に「いじめ調査」を行ったが、そのとき、「今も私がいじめられていると思う。」と答えた子が私のクラスには二人いたが、そのうちの一人は次のように書いている。

4年の時、私はとってもさいあくな年だったと思います。いつごろからかしらないけど、N子さんと私、Sさんと、今の五年生のTという子とあそんでいました。この時、なんだかぜったい一人はなかまはずれにされていました。なった人はとってもみじめです。私もなった時、その三人からかくれて毎日をおくっていました。いちばんつらかったのは、バスを待つときでした。このときにはその三人に会わなければいけません。ひっしにかくれながらバスに乗りました。「何でこうしなければならないんだろう。」と思いました。本当にみじめでした。また、仲よしになった時は、「このにもつもっていけ。」「バカ、アホ」「しめ、おめなんか。」とかよくというか、いつも言われてきたようなかんじがします。そのたんびに、ぐっとがまんし、よく家でふとんかぶってないていたことがあります。ほとんどけらいのようなかんじがしました。「私生きていくのがいやんなった」と思ったことが、何べんもありました。けど、今は、同級生でたくさん親友みたいなひとがいるのでしあわせです。

地域やクラスの中での子どもの結びつきが一般的に弱くなっている中で、統合ということでそれがより弱くなり、加えて、異常ともいえる競争関係の中に子どもが放りこまれている……そして、子どもの「ストレス」のはけ口がある時点でC君にむかっていったのではないのだろうか。今考えるとそういうふうに判断できる。もし、この時点でこのように分析できていたなら「自律神経失調症」という形でC君の成長の契機を作るのではなくもっと違った形で

の――それはC君にとってつらい形ではなく、かつクラス全員の成長の契機となるような――C君とクラスの成長の舞台を設定させてやれたのではないか。C君を含め、子どもたちに申しわけなかったという気持ちでいっぱいである。

㈢　周りの人の「目」を気にして

C君は次のような日記をよく書いてきた。

「算数のテストと家庭科のテストが返ってきました。見たら家庭科のテストは百点、算数のテストは、下の問題の所で最所は、1.4×0.8と計算して、次に8400÷1.12とテストのあいているところで計算して、7500円と出て、答はマルでした。でも式がマルじゃないのでよく考えたら、わり算で計算して答を出したのに、式を書くときにまちがえて、8400×1.12とかけ算とわり算をまちがえました。ほんの×÷をまちがえただけなのに、くやしくて、くやしくてたまりません。」

C君は、四年生の時、「Cちゃん、Cちゃん」と周りから期待されていた。だから人一倍、周りから期待されるように自分をつくりあげていこうと無理を重ねてきたのではないのだろうか。だから、すべてに完全を求め、それゆえ、たった一つのまちがいにも気が気でない……陸上大会で期待されている自分（そう思っている）しかし、風邪のため十分には練習に参加できず、その期待に応えられそうもない、しかも期待していると思っていた周りの友だちが自分を攻撃している…その時、C君は自分を見失なってしまい、「まじめ」であるがゆえにそれがいっそう深刻だったのではないのだろうか。前述のクラスのリーダー格であったGさんは次のように書いている。

「先生、私は学級委員になろうかならないかまよっていました。なりたかったんだけど、私はただ立候補して学級委員になったって、信頼されているか、信頼されていないかわからないから、すいせんされたらがんばってやろうと思っていました。けど、だれもすいせんしてくれませんでした。

私は、あーあ、まだみんなに信頼されるような子じゃないな、もっと信頼されるように努力をしないとだな、と思いました。」

周りの他人を自分の中に取り込み、そして自分の中にもう一人の自分を見つけ出し、それとの対話の中で自立へと向かっていくのではなく、「他人が自分をどう思うか」ということで自分を規制し、自分を型にはめていく――いわゆる「できる」と言われる子にそのような傾向が大きいと私は自分のクラスの子どもた

ちを見ていて思う。自分で自分をときはなせない子どもたち――教師である私の力量不足のためである。

(四) 家族のきずな、地域の結びつきが……

C君は、体の不調を訴えていたころ、家では「家がくらい、くらい。」と言っていた。ちょうどこの年、姉が高校を卒業して家から出、父は昼夜の一週間交代の勤務（二交代）であり、母も近くの材木所にパートとして出ていた。学校から帰ってもだれもいないこともあり「家がシーンとしていてさびしい。」と言っていたということである。六年生になり、一学期の途中から姉が勤めをかえ家から通うようになり、祖母もしばらく同居したりした。母親の話では、このように「家の中がにぎやかになった」ということも立ち直りの一つの原因ではないかということである。

家庭でのいろいろなことも子どもたちに影を落とす。Mさんは次のように書いている。

このごろ、いらいらしています。どうしてかというと、私のゆめは初めのころはしんじなかったんだけれど、まさゆめになるみたいで、このごろゆめは、学校でのいやなゆめばかりなので、ゆめの中と現実で、二度もくるしまなければならないのです。それよりも、お母さんとお父さんと、おじいさんの仕事のけんかです。私が宿題するころにきまってするのです。（日曜は朝から）そんなとき私は、なげてもこわれないようなものをたくさんなげます。もっと悪いときは、自分で自分をなぐって自分にやつあたりします。

……もうゆめは見たくありません。それに、お母さんたちもけんかをしてほしくありません。うるさいばかりか、もしかすると、お父さんとお母さんは会社にいって、おじいちゃんばかりになって、材木店はつぶれてしまい、借金をするかもしれないからです。でも、ゆめは見たくないと思っても、見るばあいもあるし、見ない場合もあるからしかたないし、お母さんたちのけんかをとめても、「こうやってけんかするのもたまに　なければならないんだや。」といって、なおさらひどくなるのでとめられません。

毎日、九時すぎにならないと父親が家に帰ってこない家庭が約四分の一である。八時近くまで両親の帰るのを妹と二人で待っている子もいる。親の長時間労働がいろいろなところで子どもたちに影響を与えているように思う。

隣のクラスのN君は、借金で父親が三年ほど前に蒸発し、行方が知れず、母親も「三人の子どもを捨て(?)」家を出た。祖父と高校一年の姉、そして妹との生活である。情緒

が不安定というだけでなく、人間的な発達が阻害されている一面もあり、時には問題をおこす。農業への展望のなさや、円高不況が子どもたちに与えている影響を親を通し、しっかりとつかむ必要がある。農業に誇りを持ち、専業でがんばるOさん、ナス作りのプロと自慢するPさん、お二人の子どもたちはしっかりと「自立」している。

親どうしの結びつき、地域での人間らしい結びつきはどうであろうか。前述の無視する会の中心だったL君の母親に卒直に話をしたところ、母親は「先生、私の子は今までずっとK君にいじめられていたんですよ。そのことはもう終わったことじゃないですか。」と言った。親どうし、仲よくならなければいけないのに、年々親どうしの結びつきが弱くなっていくように思える。

三年生のQさんは、他県から移住してきた。近所の家にかってに上がりこむ、時には火いたずらをする、というような問題をおこしたが、周りの人たちは見て見ぬふりをすることが多い。何か言うとトラブルが起こるということだが、ハレ物にさわるようにQさんと接するような感じもあり、自分の子どもがQさんと遊んでいると、すぐ家につれもどすということもある。

親と地域をバラバラにし、追い込むもの――何かがそうしているように思うのは私だけだろうか。

以下次号

（やまざき　とおる＝西蒲原郡分水北小学校）

〔表紙絵について〕

ハエとり器

わが家は以前、家畜をかっていたので、夏ともなると、ハエが家中をわがもの顔で飛びかっていた。これは、私が子どもの頃家で使っていた〝ハエとり器〟である。ガラス製で、中に米のとぎ汁を入れ、お膳の上にあげておく。すると、ハエはその臭いに引かれて入り込み、米のとぎ汁に突入する。これが最期で、もがいてもはいあがれない。ハエは、あえなく溺死するというしだいである。

あれ？　お膳の真中にご飯をおいて、きな粉などをかけておいた記憶もあるのだが……。もしかしたら、ハエはご飯めがけてはいり込んできて、口をつける。「もうたくさん」と飛び立ったとき、ハエはガラスの器の中に飛び込んでしまうのだったろうか？　そして米のとぎ汁に着水して溺死。

記憶が定かでないが、よく工夫したものだ。子どもの頃、感心しながらそれを眺めていた。まもなくハエどもの活躍する夏がくる。

（大平壮一＝中越高校）